入団したきっかけと思い

熊本市消防団 第１方面隊
第７分団 小崎　昭也

わたくしは、第１方面隊第７分団帯山消防団に所属しております小崎昭也と申します。
入団して今年で 11 年目になります。
今日は、私が消防団に入団するきっかけとなった出来事や、消防団活動に対する思いを述べさせていただきます。

皆様、東日本大震災のことはまだ鮮明に覚えておられると思います。
実は私が消防団に入団することになったのは、東日本大震災後、宮城県東松島市へ復興支援活動のため派遣されたときのある出来事がきっかけでした。
当時、私は熊本市役所に勤務しており、我々は熊本県と合同チームにより、発災から２０日後の２０１１年４月１日から７日まで復興支援活動に従事しました。
現地における支援活動の一つとして、仮設住宅の申込み受付を行いましたが、
特に印象に残っているのが、津波で家が流され、家族も失い、避難所に１人残されたお母様が仮設住宅の申込みに来られた時のことです。
親戚の方に付き添われて、やっとの思いで窓口に来られた、その方から受け取った申込書の同居予定家族欄には、津波で流されたご主人とお子さんの名前も記載されていました。
本人も仮設住宅に入るのは自分だけだということは分かっているのですが、ある日突然一瞬にして家族を亡くし、現実を受け入れることができなかったのではないかと思います。このときほど、何もしてあげられない、自分の無力さを感じたことはありませんでした。

また、我々が派遣された東松島市も含めて、被災地では多くの消防団員の方々が、連日、警戒巡視や避難所での支援物資の配布など、献身的な活動を行っておられましたが、この東日本大震災により 252 名（内公務災害認定者 198 名）の消防団員の方がお亡くなりなられたことを決して忘れてはいけません。

これらの経験から、私は、公務員としての立場だけでなく、一個人として何か地域社会に奉仕できるような活動をしたいと強く思うようになり、入団することを決意しました。

一方、令和５年８月 31 日総務省消防庁の「消防団の組織概要等に関する調査（令和５年度）」によりますと、消防団員数は昭和 30 年に 200 万人を割り込んでから、

これまで年々減少傾向にあり、平成２年度には100万人を割り込み、令和５年４月現在、約76万人にまで減少しています。加えて団員の高齢化も進み、このままでは将来、消防団の存続が危ぶまれる状況にあります。
　団員を増やすためには、処遇の改善や、事業所への働きかけ、あるいは地域ぐるみの取り組みなど、より多様で魅力ある環境を作る必要があります。

　このように消防団を取り巻く環境は厳しい状況ではありますが、これからの消防団は火災や災害現場での活動はもちろんのこと、日ごろから人に優しい存在であるべきだと考えています。
　皆さん、漢字の「優しい」という字を思い浮かべてください。優しいという字は、人偏に憂うと書きます。つまり、「憂う人、嘆き悲しむ人に寄り添う」それが優しいということです。私も、今後起こるとされている南海トラフ地震など、大規模災害の発生も切迫している中、地域防災と減災において中心的な役割を担っていくと共に、地域において優しい消防団員になれるよう日々精進して参る所存です。
　以上が、私が消防団に入団したきっかけと、消防団活動への思いです。今回、自分の経験を振り返ることで、地域の安全と支え合いの大切さを改めて考えさせられる機会となりました。ご清聴ありがとうございました。